

2010年度メディア・アンビシャス大賞・放送部門

【放送部門・大賞】

「あるダム履歴書 ～北海道・沙流川流域の記録～」(NHK)

米原尚志

ライフワークとしての、アイヌ民族の長期間取材をベースに、ダム問題をステレオタイプな政治・行政批判ではなく、アイヌ民族の精神を語りつつ、人間の謙虚さを描き、未来へ向けた私たち人間の普遍的な問題を提起している。

【放送部門・メディア賞】

「雨はすべてを洗い流す―在宅死に向き合う三家族の絶望と再生の記録」(u h b)

後藤一也

在宅死に向き合う3家族の姿を通し、「死」を残されたものがどう生きるのかという「生」の問題として描き、日常描写の挿入によって、私たち自身の問題であることを提起し、新しい表現の視点に挑戦している。

【放送部門・アンビシャス賞】

「NICU その先の現実 ～医療と福祉のはざままで～」(STV)

遊佐真己子はじめ番組「NICU」制作チーム

最新の高度な医療を通じ、人の命の深い問題まで提起しつつ、ポジティブな解決の方向もルポしている。また女性スタッフのみでの撮影など、表現の工夫が随所に見られ、被写体との関係に誠実な視線がある。

【放送部門・入賞】

「英霊か犬死か～沖縄から問う靖国裁判」(QAB琉球朝日放送)

三上智恵

短い時間ながら、「沖縄」という視点からみた靖国問題の、東京発の報道とのズレを明らかにし、一般的なマスメディアの論調にとらわれない、メディアの視点を獲得している。

【活字部門・大賞】

「いのち～自死3万人の時代に」（北海道新聞札幌本社編集局報道本部取材班）

近藤浩部次長、森貴子、細川伸哉、田中瑠衣子

40万人の都市が消滅した。こんな事態が起きたら、社会的には大問題となるだろう。2010年で13年間連続3万人以上の自死者が記録され、この間の累計人数は旭川市の人口を上回っている。日本は世界の中でも一番早い速度で少子高齢社会となり、少子化にはほとんど歯止めがかからずにいるにもかかわらず、である。

この大型連載企画記事は、「なんとか一人でも自殺者を減らした」との熱い思いを持って、深刻なこの問題に計4部にわたりメスを入れた。第一部は「ただ、生きていてほしかった」（4月24日から7回と反響特集）、第二部「うつを知る」（6月19日から7回）、第三部「向き合う」（8月23日から5回）、第四部「提言」（10月1日から6回）で、自殺で「大切な人」を失った人々の声や自殺原因のトップのうつ病対策、自殺防止に向き合う現場、さらに専門家からのアドバイスを広く取材、まとめあげている点が会員から高く評価されたものです。

【活字部門・メディア賞】

「追跡 累犯」（毎日新聞東京社会部取材班）

東京本社編集委員 花谷寿人

2010年全国で万引で摘発された高齢者は2万7千人以上と過去最多で、しかも20年連続で増え続けている。そして、その中の大半は生活困窮や孤独感が背景にあり、この結果社会と刑務所を行き来する人も少なくない。また同様な理由で知的障害者も自立できないが故に、累犯を重ねるケースが目立っている。

こうした人たちを「追跡 累犯」というワッペンで、企画と記事を組み立て、刑事司法と福祉との狭間に落ち込んだ人たちの現実や、根源的な原因としての社会的無関心と支援施設、政策の貧困さを浮かび上がらせている。われわれがいつ裁判員として、こうした累犯者を裁く立場になることが想定できる中で、改めて鋭くこの問題の根源を投げかけたことに、会員から称賛と敬意が寄せられました。

【活字部門・アンビシャス賞】

「沖縄 怒り疲れ虚脱／ヤマトよ偽善だ」（朝日新聞）

那覇支局長 後藤啓文

09年の政権交代に伴い、大きく揺れ動いた米軍普天間飛行場の移設問題。しかし、現段階では解決の見通しが立っていない。この現状に対して沖縄からは「痛み伝えぬ本土メディア」との批判が強く巻き起きているが、その矢面に立っている全国紙、朝日新聞がそ

の声を真摯に受け止め、自己批判的な内容を含めて沖縄の置かれている現状を多角的に報道した点が会員から評価を受けた。

【活字部門・入賞】

「ウラン渴望／ソ連の原爆開発と日本」（北海道新聞札幌本社編集局札幌圏部）

編集委員 小坂洋右

第二次世界大戦後に現出した米国とソ連（現ロシア）との冷戦時代。米国が日本に落とした2発の原爆にショックを受けたソ連が懸命に原爆の開発を進める傍ら、原料のウランを探し回ったことや、シベリアでの採掘者に日本人抑留者が係わったこと、さらにウラン確保を最優先課題としたため、日本の占領を一元的に米国へ譲ることとなったなど戦後秘話に光を当てた力作だった。

【活字部門・入賞】

「豪邸見るツアーで逮捕／フリーター労組が国賠訴訟」（北海道新聞東京支社編集局報道センター）

編集委員 往住嘉文

格差社会を告発する狙いで東京のフリーター労組が当時のセレブ総理、麻生太郎さんの豪邸見学ツアーを決行したものの「無届けデモ」として参加者が逮捕された。これに対して昨年2月「不当逮捕だ」として訴訟が起こされた。デモ自体は当時報道されたが、この訴訟はマスコミでは無視同然。デモやチラシ投げ込みなどが必要以上に規制され「表現の自由」が問われている折、貴重な報道だ。